

国 学 と 民 俗 学 と の 接 点

—宇井可道の民俗研究を中心に—

奥 谷 道 夫

1

民俗学の源流を考えてみた場合、その始源を「日本に近代科学が移入され、科学的自覚にもとづいて民俗学的諸問題がとり上げられた時から⁽¹¹⁾」と考えて行くとすれば、そこには約半世紀、さらに溯ってその発端を人類学 Anthropology に求めても、1884 年まで溯り得るにすぎない⁽¹²⁾。民俗学を、英語の Folklore (1846 年、J.W. Thoms が A. Merton の名で書いた“Folklore”を源とするもの)、あるいは、これと異った概念・内容を持つものであるが、ドイツ語の Volkskunde (これは W.H. Riehl の 1858 年の講演“Die Volkskunde als Wissenschaft”に由来し、1891 年 Zs. des Vereins für Volkskunde「民俗学協会雑誌」によって確立されたもの)⁽¹³⁾ などと同義語としてとらえて行くことが、科学としての民俗学の歴史の対象となり得るものであって、非常にその歴史は短く、またそれ故に、今なお未開拓の分野が多い。

西欧の民俗学はその後順調に発展し、多くの業績があげられ、またその方法的なものについてもいくつかが紹介され、これが日本の民俗学の体系化に役立った。主なものとは日本語に翻訳された⁽¹⁴⁾。

こういう西欧民俗学の方法をとり入れた、科学的な民俗学研究が、柳田國男氏にはじまるのは論を待たない⁽¹⁵⁾。

しかし、日本における民俗研究は体系的なものではなかったにしろ、柳田氏の日本民俗学成立以前に民間習俗、伝承といったものへの関心が、記録にとどめられているものが少なからずあり、近世以来のこうした研究の累積が、日本民俗学成立の基盤となったといっても過言ではあるまい。

民俗学研究の前史をなした民俗的諸研究としては、菅江真澄の遊覧記⁽¹⁶⁾を頂点として、屋代弘賢「風俗問状」その他、多くの地誌・紀行・民俗記録などが江戸時代につくられている⁽¹⁷⁾。ここにとり上げる宇井可道は明治のころ活躍した人物として、これら江戸時代の民俗的諸研究⁽¹⁸⁾の方法を学んだものと考えられるが、一方紀伊は本居大平以来の国学の伝統をもっており、国学的方法による古代への関心が、民俗的なものへの関心と重なりあっている。こうした紀州における本居系国学⁽¹⁹⁾の伝統が、宇井可道や南方熊楠⁽²⁰⁾など、柳田氏の日本

民俗学に先立ち、かつその成立に直接間接に影響を及ぼしたと考えられる紀州人の民俗的関心に与えた影響は、大きかったものと考えられる。宇井可道も、南方熊楠も、その学問にはそれぞれ程度の差はあるけれども、いずれも国学的なものへの志向⁽²¹⁾と、民俗研究への傾斜が、表裏一体をなして存在していたように思われる。

もともと宇井可道は国学者の系列につながるものであり、南方熊楠も国学や神道の影響⁽²²⁾をうけていた。国学は元来一種の文学運動として出発した⁽²³⁾ものであるが、宣長学から篤胤学への展開が、非常に政治主義的色彩を帯びて来て、かつそれが国学の流れの主流となって来るために⁽²⁴⁾、国学の領域をすべて篤胤ないしその流れを引く岡熊臣⁽²⁵⁾あるいは大岡隆正⁽²⁶⁾鈴木重胤⁽²⁷⁾などの国学者たちの思想だけに限定して見るきらいがあった。しかし、たとえ主流とはなりえなかったにしても、平田学に対する本居学の流れが毅然として存在したのであり、その流れの中には宣長学の本質的なものが、かなり純粋な形で伝流したものと思われる。元来宣長学においては、「玉勝間」に「そもそも道は、君の行ひ給ひて、天の下にしきほどし給ふわざにこそあれ、今のおこなひ道にかなはざらんからに、下なる者の、改め行はむは、わたくし事にて、中々に道のこころにあらず」といっているように、非政治的なものとして存在し⁽²⁸⁾、政治的なものよりも、文学の独立が重んぜられ、「文学的植神がさながらに政治原理とされる」⁽²⁹⁾ところを本来もっており、これを丸山真男氏は「文学が文学ながら政治化されることは、反面からいうと政治が非政治化されること」だとされた⁽³⁰⁾。しかし、従来宣長学における非政治性とされたものの実体を追及した松本三之介氏は、「下たる者はただよくもあれあしくもあれ、上のおもむけにしたがひをるものにこそあれ(玉勝間)の言葉にあらわれるように、被治者に対しひたすら服従の要を説く所に宣長学の政治思想的特質があるとされ、その非政治性は「裏返された政治性にすぎなかった」ことを明らかにされた⁽³¹⁾。しかし、宣長において矛盾なく構成されていた歌学と道学は、その死後分裂し、篤胤学における道学に対し、本居大平の系統は歌学を継承し、その文学的・語学的なものの追求は、さらに民俗的関心をよびおこす点があった⁽³²⁾。本居大平、内遠ら

が紀州藩の命を受けて「紀伊統風土記」を編纂したのに対し、秋田藩において、菅江真澄が藩命を受けて、「花の出羽路」「雪の出羽路」「月の出羽路」(註23)等、出羽国の一連の地誌を著述しているのは興味深い(註24)。

もともと、科学的方法論の上に立つ柳田国男氏の民俗学も新国学をめざしている点があり(註25)、国学より日本民俗学への発展ないし転回については、日本民俗学史および日本民俗学前史の重要な課題の一つとなるであろう。

なお宇井可道および南方熊楠への評価の点から見て、「日本民俗学大系」第11巻地方別調査研究、和歌山県の記事には、当然書き改められるべき部分が少なくないように思う(註26)。

この小稿は、本居大平の系統を引く国学者であり、同時に民俗研究家であった宇井可道の、民俗研究家としての業績を明らかにすることによって、日本民俗学前史の上で占める彼の位置を明確にし、あわせて紀州藩において伝流した本居大平系の国学の一面と、その民俗学成立との関連を考察してみようとするものである。

註1 関敬吾 「日本民俗学の歴史」(「日本民俗学大系」第2巻、1958年、F.84。)

「民俗学史」(民俗学研究所編「民俗学辞典」1951年)P.587—595

註2 前掲「日本民俗学大系」第2巻P.84

註3 同書P.83

和歌森太郎 「日本民俗学概説」(1950年)P.60—62、同氏「日本民俗学」および「民俗学定義と課題」(民俗学研究所編、民俗学辞典)P.582—583

註4 たとえば、Miss C. Burne "Handbook of Folklore" (岡正雄訳「民俗学概論」1927年)、Arnold Van Gennep "Le Folklore" (後藤与善訳「民俗学入門」1942年)、P. Saintyves "Manuel de Folklore" (山口貞夫訳「民俗学概説」1944年)、Kaarle Krohn "Die folkloristische Arbeitsmethode begründet von Julius Krohn und weiter geführt von nordischen Forschern" (関敬吾訳「民俗学方法論」1951年)など。

註5 「わが国における民俗学の研究は1913年に柳田国男と高木敏雄とが、郷土研究という雑誌を出したのにはじまる。」(前掲「民俗学辞典」P.587)。なお、このことについては、柳田国男「故郷七十年」を参照。

註6 柳田国男「菅江真澄」(1942年)によると、彼は賀茂真淵の流れをくむ国学者であるが、国学者としての業績は認められない。しかし民俗研究家としては、すぐれた観察眼をもって当時の信州や東北・蝦夷の民俗を書きとめており、ことに各地の習俗等に興味を持っていた。

なお菅江真澄は1754年、現在の豊橋市のあたりに生れ、1829年秋田県仙北郡で死んだ。(内田武志「菅江真澄著作年表」(菅江真澄未刊文獻集2所収)による。)

註7 前掲「民俗学辞典」P.587—588

註8 江戸時代における民俗の記述は、前記の地誌、紀行、記録等のほかに、各種の随筆類にも収録されている。著明な文学者によるものとしては、たとえば山東京伝「骨董集」中の風俗についての記述、曲亭馬琴「燕石雜詠」中の方言の記述などすぐれたものといえるが、無名の文人の随筆中にもおびただしい数に上る民俗の記述が見られ、いずれはこれらを系統的に整理する必要がある。現在のところ、これらを大観するのに朝倉治彦、柴田宵曲、鈴木棠三、森統三編「随筆事典」(1960—61年)、その中でも「風土民俗編」「奇談異聞編」が便利である。

註9 山田勘蔵「本居宣長翁全伝」(1938年)に宣長一門の伝記について詳述されているので参照されたい。本居系国学の系譜はつぎの通りである。

本居宣長—
—春庭(松坂、鈴屋系)
—太平(養子)—内遠(養子)—豊別(紀州)

また本居大平、内遠らの参加した「紀伊統風土記」(1839年完結)は民俗資料を豊かに含み、「紀伊名所図会」(1851年完結)とともに、後の紀伊の知識層に与えた影響は少なくない。大平の系統は、宣長のうちたてた国学体系の中で、歌学を重視したわけだが、大平には「解袋の日記」(1772年)「草枕の日記」(1773年)等の日記類や、「古言笈集」(1808年)その他の地名事名集成等の著があり、内遠には「紀伊国名所歌集」(1843年)「法喜美多満」(1847年)など、民俗的関心をうかがい得る著書がある。

註10 紀州が生んだ不世出の偉人、南方熊楠の全貌は容易にとらえられないが、「南方熊楠全集」(1951—52年)は、その業績の一部をつたえている。

註11 この点についての詳論および両者の思想的関連については別の機会に譲るが、両者はいずれも民俗的なものに関心をもち、かつ親交があった。両者の親交については南方熊楠は、可道の嗣子宇井縫蔵が「紀州漁譜」を著わした際、次のようなサインを与えている。

「宇井ぬしの紀州漁譜世に顕はれて是れ迄無頓首だった人々も大きに海族に気を付ける様になつた悦びの余り、ことしより幸は多かり沙千狩。熊楠大正十四年二月十五夜宇井君とは二代続いての交際故…(下略)」と記している。(下点筆者。岩崎彰氏蔵)

「故宇井縫藏所蔵澤宅帖」)

- 註12 たとえば、南方熊楠「神社会併反対意見」1912年（中山太郎「学界偉人南方熊楠」1943年、所収）によりその一端を察することができる。
- 註13 西郷信綱「国学の批判」（1948年）あるいは同氏「近世の学問と思想」（前記「国学の批判」を改訂抄録したもので「日本文学の方法」1955年、改裝版1960年所収）P.314
- 註14 松本三之介「国学政治思想の研究」（1957年）P.67
- 註15 岡熊臣（1783年—1851年）については大川茂雄・南茂樹編「国学者伝記集成」（1934年）P.1279参照。
- 註16 大岡隆正については、田原嗣郎「幕末国学思想の一類型——大岡隆正についての断面的考察——」（「史林」44—1, 1961年）、多田顯「国学者大岡隆正の経済論」（「文化科学紀要」3号, 1961年）前掲「国学者伝記集成」P.1466、および野村伝四郎編「大岡隆正全集」（1937年）等を参照。
- 註17 鈴木重胤（1812年—1863年）については、星川清民「鈴木重胤伝」（1943年）樹下快淳編「鈴木重胤全集」（1937年—1944年）および高階成章編「医学大系、鈴木重胤集」（1944年）等を参照。
- 註18 前掲「近世の学問と思想」P.315
- 註19 丸山真男「日本政治思想史研究」（1952年）P.174
- 註20 同書、同頁
- 註21 前掲「国学政治思想の研究」P.57
- 註22 文学より民俗への展開については、近世文学者の民俗研究などの方面からも察し得る。
- 註23 「花の出羽路」「雪の出羽路」「月の出羽路」は「秋田叢書」（1932年）3, 5, 6, 7, 8, 9, 10巻所収。未収録分で、内田武志編「菅江真澄未刊文献集2」（1954年）に収録されたものもある。
- 註24 もちろん「紀伊統風土記」にしても、「雪の出羽路」等にしても、藩の命じた意図が政治的なものであって、文学的なものでないことはいうまでもない。
- 江戸時代後期は紀州や秋田だけでなく、幕府や諸藩において地誌撰述がひじように盛んであった。その代表的なものとして幕府の手で多くの年月と人員をかけて作り上げた「新篇武蔵風土記稿」（1825年完成）「新篇相模風土記稿」（1840年完成）つづいて「御府内風土記稿」（これは1872年焼失し、その資料として用いた御府内備考が現存）などをはじめとして、長州藩の「防長風土注進案」（1841年—1852年）会津藩の「新編会津風土記」（1809年）、芸州藩の「芸藩通誌」（1825年）などをあげることができる。その編纂にあたった人物は漢学者が中心となる場合が多かったらしく、「芸藩通誌」における頼杏坪のごとく著名

な学者の名があげられる。

これらの編纂の動機は藩によって事情の異なる点もあるが、第一義的には藩政改革への資料作製等の政治的動機にあったことが考えられるが、これについて、岩根保重氏は次のようなものをあげている。

- ① 地理民風を明らかにして行政上の参考とする。
- ② 政治社会情勢の安定期に入って、この種の文化事業を営む余裕を生じて来たこと、或は封建体制の整備に伴い、系譜を整え、家史を修すると共に、領土についてもこれを誇示しようとしたこと。
- ③ 私撰地誌も藩主の援助があって、藩の学者や守土の史によって成就されたものが多いが、天下泰平になって、安住生活が営まれるようになり、定住の郷土愛から発したと解せられる点もある。（岩根保重「江戸時代における幕府諸藩の地誌編纂事業と長州藩」（防長風土注進案付録4所収, 1961年）

これらの官撰地誌以外に、「甲斐国志」（1814年）「太宰管内志」（1840年）など私撰の大部の地誌もあり、これらについてもやはり政治的意図が強いと筆者は考えるものであるが、前記岩根氏のいわれた③の点も一つの要素であろう。しかし、官撰私撰を問わず、その意図と関連があるかないかは別として、兎に角民俗に関する記述にかなり強い関心が持たれている場合が多いということには、民俗研究史上重視しなければならない。

なお岩根氏が主としてとり上げた「防長風土注進案」の政治面での分析については芝原拓巳「幕末における政治的対抗の基礎的形成——「防長風土注進案」の分析を中心に——」（土地制度史学, 10号, 1961年）があり、その政治性が分析されている。

また「紀伊統風土記」に続いて、「紀伊名所図会」が刊行されるが、これも紀伊に限らず、江戸、東海道、都その他各種（「日本図会全集」として集成された）の刊行が流行する。この方は各地の名所記などとともに、新興商業資本家の実用的関心に応えるという経済的要素が強いものと考えられる。これについては北島正元「封建文化の展開」（河出版「日本歴史講座, 中世篇2」1951年）参照。

- 註25 柳田国男「新国学談」第1冊「祭日考」第2冊

「山宮考」第3冊「氏神と氏子」(1946—47)

なお、この点について指摘したものとしては、神島二郎「近代日本の精神構造」(1961年)P.8, P.14の註14等を参照。ただし、「本居学から平田学に発展させられた国学の学問的方法論を発展的に継承したものは、日本民俗学において他にない」(下点筆者)といわれた下点の部分については首肯しがたい。このことについては後に触れる。

2

宇井可道は1837年(天保8年)、和歌山県西牟婁郡三栖村大字上三栖(現在、西牟婁郡牟婁町上三栖)に生れた。宇井多右衛門穂積豊成の子で、安政4年兄勝之助の死により嗣子となり、文久元年25才で上三栖庄屋となっている^(註1)。

1867年(慶応3年)より5年あまり田辺の国学者熊代左衛門繁里^(註2)について、国学・歌学を修学している^(註3)。そのころ32才で明治維新をむかえた。

明治維新後、彼は上三栖村長、和歌山県西牟婁郡役所書記、同第一第二科長、田辺銀行支配人等を歴任、1902年(明治35年)66才で公職より退き、晩年はもっぱら風流に親しみ、1922年(大正11年)86才の高齢で西牟婁郡田辺町(現在は田辺市)で没している^(註4)。その間、1869年には、和歌山藩に「寺院合併建白書」を提出し、明治7年小学校開設の際は教部省より区長に兼ねて権訓導に補せられており、また1875年(明治8年)には和歌山県第22番中学区取締兼務を申付けられており、さらに翌1876年には「地租改正調査に付為煩問該係へ当分出仕被申付」れている^(註5)。開化期における地方のインテリとして認められ、その役割を果たしているようである。

宇井可道は上記のごとき経歴をもっているが^(註6)、その学問的系譜については、雑賀貞次郎氏の次の文が要をとらえている。

「紀州田辺に於ける和歌は旧藩末に興ったといふのが若し妥当でなくば、頗る振興したといふが当れりであらう。当時和歌山に内遠、大平、諸平^(註7)らの諸家あり、いずれも雄藩たる紀州に隸仕し、内遠大平両大人は家学を継承して新らしき創見あり、諸平大人は近世歌壇の雄、全国の歌人をよくリードすると云ひ得ずとも、歌壇を風靡するの概があり、所謂皇学の全盛と歌謡の流行が一世の風潮となっているのに乗じて声誉をほしいままにしてゐたが、田辺は和歌山との地理、藩政、商業、交通等各方面に密接の関係、交渉があり、その影響、刺激は必然且つ深刻だった。乃ち田所頭周翁は周囲とともに内遠に投じ^(註8)、次いで大平、諸平に接近し、さらに田辺藩に推挙して熊代繁里大人を田辺に迎へ、大人を中心として国学の講究と歌道の振興を図った。大人は乃ち南紀

の歌才、蔚然として一家をなし、紀の一隅にありて歌壇に雄視した。田辺に多数の歌人が輩出し、空前の盛況をなすに至った。打聴・齋蛙・朝川、清渚の諸集だけを見ても、その頃の田辺の歌人がいかに多かったかが知れる。だから頗るに振興したといふが当れりであらう。

而して繁里の後、これを継承したのは、吾が瑛皇の主宇井可道大人であった。大人は若冠二十五才から老齢六十五才に至るまで、前後四十年間、乃ち生涯の大部分を村治と郡政に従ふた。しかも大人の真骨頂は読書人であり、歌人であり、著述人に存した。その村治と郡政の間には藩末の風雲^(註9)あり、明治維新あり、諸政の更始一新、殊に地租改正、町村の編製^(註10)あり、後ちには南紀の大水災ありて、煩忙と労苦は推積し続出したが、よくこれを克服して能吏の誉れがあった。(中略)大人の歌才と造詣と人格と徳望は、自からはからず、いつしかに繁里の後を承けて、田辺の歌人の師表たるばかりでなく、歌人の名を広く全国に布くに至った^(註11)。」

その後、宇井可道は1889年晩桜社を設け、さらに1912年良風社と改め、歌道に精進するとともに、数々の民俗的研究の成果をもたらしたのである。

熊代繁里から宇井可道への系統を見るに、両者の共通点として、和歌への志向が強く働いている点があげられ、またとくに可道は民俗的なものへの関心が強い。こういった事はいずれも本居大平・内遠以来の紀州諸国学の伝統的傾向に根ざすものといふことができる。もともと本居宣長の国学は主情的な傾向が強い^(註12)が、道学としての国学を中心とする政治思想的傾向^(註13)をも第一義的に持っていたことは、既に前節でとり上げた。宣長学における二つの大きな流れであった歌学と道学の調和の源についての考究は今後を待たねばならないが、宣長の師賀茂真淵の国学の中にも、その双方の祖型と見られるものが存在したと筆者は見ものである。民俗的関心は、二つのうち、歌学の流れをくむ文献学的傾向の中から生まれるのであって、ことに和歌に深く傾倒した真淵の国学の中にも、民俗的関心が内在したのであり、^(註14)これが宣長を経て大平の系統に引き継がれていったのであろう。

すでに前節で考えたように、宣長学と篤胤学とでは大きな差異があり、宣長において「裏返しにされていた」政治性は、篤胤およびその系統では裏返しにされたものでなくなり、文学的、歌学的な立場を喪失して、神道性政治性が前面に押し出され、やがていわゆる「草莽の国学」^(註15)といった傾向に発展するのである。もとより篤胤学も宣長学より生まれ出たものである以上、本質的な変貌をなしとげたのではない。たしかに宣長学は非政治的な外面をもっているが、宣長学本来の姿においても、儒教的道德理念を批判し否定し、儒教の世界から脱却す

ることにより、現実の政治的原理への密着度が一層高められたのであり^(註16)、これは松本氏のいう所とも一致する。しかし、篤胤学は宣長学の一面を伝えただけでも、全体を伝えたものではなかった。真淵より宣長に伝わった国学思想の他の重要な一面は、本居大平系の国学の中に伝えられたのである。両派がこのような差異をもつことは^(註17)、両派の抗争に発展することもあったのであって、このことは平田篤胤が六人部是否に宛てて、城戸千植ら本居派の陰での妨害を預いた書簡などからも察知できるし^(註18)、歌学を重んじた伴信友とも大猿のごとき仲となっている。当時の思想界に与えた影響からいうと、篤胤学が主流としての地位を占めるものであり、その政治的課題はすでに宣長自身の思想中に内在した^(註19)にしても、宣長学は本来宗教性の稀薄な文献学^(註20)として成立したものであり、その中で大きな地位を占めていたのが歌学であったことは論をまたない。本居大平系の国学はこの流れを継承し、篤胤学とは大きく異なった一面をもって、紀州の国学思想として伝流するのである。もちろん封建危機は紀州にも訪れたけれども、大平系国学においては、かつて宣長がとった政治的立場と同一平面上に立って、文学性を保持しつつこれに対処したものであった。

つまり、宣長学の「裏返しにされた」政治性は、大平の系統にはそのまゝ伝流し、歌学を重視し文献学の根本的性格を保持したが、他方篤胤学は道学的なものが表面におし出されて文献学から離れ宗教化し、根本的性格においては同一地盤にある両者が、現象的にははなはだしく異なった様相を示すことになったものと思われる。

註1 宇井縫蔵編「宇井可道遺稿瑛皇集」年譜による。年譜は以下いずれも数え年。「瑛皇」は「アラクマノヤ」とよみ、歌集全体に「瑛皇集」文集全体に「瑛皇遺筆」の名称を冠しているが、これは宇井可道自身がそのように命名したものではなく、「瑛皇集」1、2は没後まもなく刊行されたが、残る和歌および随筆類を、1936～37年に宇井縫蔵が整理謄写した際、便宜上このように命名したものである。

宇井縫蔵は和歌山県西牟婁郡岩田村、(現在、西牟婁郡上富田町岩田)流浪助右衛門二男として1878年に生れ、1898年可道長女知可子と結婚、可道の養嗣子となった。竜水と号し1936～37年に可道の遺稿を編集し、自ら謄写印刷した。本稿はその編集本によっている。これは間々誤写と思われるものをまじえているが、その敷衍を防いだ努力は多とせねばならない。なお彼は動物学、植物学に精通し、「紀州漁譜」「紀州植物誌」「伝説の植物つながしは」等の著述がある。晩年は紀州郷土史に興味をもち、しばしば「紀州文化研究」に論考を発表した。1947年没。

註2 「大日本人名辞書」(1891年増訂版)によると、熊代繁里は紀州日高郡の生れで、和歌山で加納諸平、本居内遠について国学を学んだ。和歌山藩の命により「紀伊国名所図絵統編」の撰述に従事。1859年田辺修道館皇学教官に任ぜられた。(安政の大獄のあった年である。)廃藩置県後、熊野坐神社の権宮司となり、1876年(明治9年)46才で没した。彼は歌学を得意とし、著書に「早苗日記」「常磐集」「嘉永百人一首」「洞花集解」「清渚集」などがある。宇井可道は熊代繁里の伝記を書きとめており、これによって繁里の学と人をうかがうことができる。なおこの「大日本人名辞書」の記事は「日本教育史資料」によったもので、「国学者伝記集成」P.1507にも、同じ資料からの引用がみられる。また「清渚集」は横守部編の国歌大観様の同名の書がある。

註3 前掲書、年譜
なお同書におさめられた鈴木睦の序文によれば、「此大人若かりし時に其頃皇国学の大家なりし田辺の松蔭熊代繁里大人の門に入りて皇国学と和歌の道とを学ばれ上三柄の里より二里にも余れる道を遠しとせで時々其許に通はれて数多き教子の中にも歌の道にすぐれさせてむねと之を嗜まれ漸くそが至り深くなりて吾が木の国はいふも更なり他の国々の歌の上手てふ人々の中にも数まへらるるに至りけり」と記されている。しかし、宇井可道の和歌の芸術性については、本居宣長の和歌同様、その数の膨大なものにも拘らず価値を認めがたい。宣長系の国学者の和歌はみな一般的に同様のことがいえる。

註4 同書、年譜による。

註5 同上

註6 雅賀貞次郎氏は南方熊楠の教示をうけ、また柳田国男氏にも師事した。後述のごとく柳田氏が宇井可道の存在を知ったのは同氏を通じてであったが、同氏が可道と直接面識をもたなかったことは、本文引用部分の後尾に自から記しておられる。

註7 本居内遠、本居大平、加納諸平

註8 「内遠翁門人録」嘉永2年の項に、田所左衛門頭周の名が見える。(「増補本居宣長全集」首巻、1938年)P.86

註9 「幕末の風雲」の誤写であろう。

註10 「編成」の誤写であろう。

註11 宇井縫蔵編「瑛皇集」第廿一編雑(下)(1937年)P.65—67

註12 前掲「国学政治思想の研究」P.26—38

註13 同書 P.42

註14 菅江真澄が賀茂真淵の流れを引くことは、その典型といえる。(前掲柳田国男「菅江真澄」)

註15 伊東多三郎「草莽の国学」(1945年)

註16 尾藤正英「日本封建思想史研究」(1961年)P.283

註17 本居大平が、篤胤学に対してどんな気持をもって
いたかを知る材料として、篤胤の著「玉櫛」にの
せた大平の序文があり、それには「此玉だすきに
ぬきつらねたるあげつらひのなかには、わが翁の
さとしごととことなるあり、大平等が思へるおも
ぶきにもことなるあり。それやがて道のさとしの
やゝにととのひゆくつぎてなるべし。はたわが翁
さのとしごとにも、われによりて物学ばむともが
ら、わが後に又よき考へいできたらむには、わが
ときごとにななづみそ、云々とあるをも思ひ合す
べし（天保二年六月十八日付）」とある。外交辞
令の中に篤胤の学が宣長や自己の学とちがうこと
を明言している。

註18 前掲「国学政治思想の研究」P.66

註19 渡辺金造「平田篤胤研究」（1942年）P.109—
133。また同書所収の篤胤書簡集参照。

註20 前掲「国学政治思想の研究」F.57

註21 村岡典興「本居宣長」（1928年改訂版）P.341—
363

3

宇井可道の名は、柳田国男「山の人生」中に見られ
る^(註1)。

「紀州西牟婁郡上三栖の米作といふ人は神に隠されて
二昼夜してから還って来たが、其間に神に連れられて空
中を飛行し、諸処の山中を經廻って居たと語った。食物
はどうしたかと問ふと、握り飯や餅菓子などたべた。ま
だ袂に残って居ると謂ふので、出させて見るに皆柴の葉
であった。今から九十年^(註2)ほど前の事である。又同じ
郡岩田の万蔵といふ者も、三日目に宮の山の笹原の中で
寝て居るのを発見したが、甚だしく酒臭かった。神に連
れられて摂津の西ノ宮に行き、盆の十三日の晩、多勢の
集まって酒を飯む席にまじって飲んだと謂った。是は六
十何年前のことで、共に宇井可道翁の瑛屋隨筆^(註3)の中
に載せられてあるといふ。（雑賀貞次郎君報^(註4)）」とい
うのがそれである。

ここに出て来る「瑛屋隨筆」は、すなわち可道の散文
業績の大部分を網羅するもので、一冊の書名でない。可
道自身の意志としては、「瑛屋隨筆」の言葉は、いくつ
かの隨筆的なものに冠するものとし、これに属さない独
立的な冊子には、それぞれ独自の名称を与えて、これと
は区別しようと考えていたらしい。ところが、1936—19
37年に、彼の養嗣子宇井縫蔵が、遺稿の散佚をおそれ
て、これを手づから謄写印刷した際、便宜上、可道の散
文全体に「瑛屋隨筆」、韻文全体に「瑛屋集」の名称を
冠せしめたものである^(註5)。先に「瑛屋集」（正統）と
して刊行されたものをも含めて、これらはすべて私家版

として刊行せられ、「民俗の記載だけを出版したらどう
か」という柳田氏のアドバイスも結局実現しなかった^(註6)
ため、ほとんど埋没し去ろうとしているものである
が、中には各種の雑誌に発表されたり、種々の書物に引
用されたりして、公に知られているものもある^(註7)。

「瑛屋隨筆」は前述のような理由によって、彼の遺稿
中、宇井縫蔵によって編集された散文全体に冠せられた
名称であって、編集整理せられたものは、可道の遺稿全
体の三分の二に当り、全業績を網羅するものではない
が、業績の主要なものはことごとく含んでいると考えて
よく、これによって、彼の業績全体を察知できるものと
考えられる。

「瑛屋隨筆」は上記のような事情によって、彼の散文
的業績の主要部分に冠したものであるが^(註8)、その内容
は多岐にわたり、民俗研究、歌学、古典研究およびいわ
ゆる隨筆的なものを含んでいる。各篇の表題を示すと、
次の通りである。

第1編 神武天皇御東征御道考

第2編 浪乃藻屑

第3編

第4編 牟婁郷名勝誌

第5編 女百人一首

第6編 悲哀百人一首

第7編

第8編

第9編

第10編 西塔武蔵坊弁慶事蹟考

第11編 我が家の由緒

第12編

上記が「瑛屋隨筆」の全容であるが、中で編名をもた
ないものが、3、7、8、9、12の5編あり、この5編
が、もともと宇井可道自身が「瑛屋隨筆」の名を冠せし
めようと考えたものであることは、先に述べた通りであ
る。表題から見てわかるように、編名のついているも
のはいずれも民俗研究ではない。編名をつけなかったも
のの中で、第7編が民俗の記述を集めたものであるが、
念の為に編名のないものの目次をあげてみると、次のよ
うになる。

（第3編）牟婁温泉考 熊野沿革大意

万葉集略解一御歌二首について 續の熊野参りといふ
事 熊野九十九王子の事 置鹿火の説 さきくさについ
て折雨の事 流行言葉 無礼の言葉 變頭の亀 逆崎と
いふ事 死去の名詞 実名を呼ぶを無礼とする事

（第7編）1. 天狗の説 2. 狐の説 3. 兵生の松若
が事 4. こへびのふしぎ 5. つばめまきはは
6. 海幽霊 7. 安珍清姫が事 8. 清水浜臣が遊京漫
録に白髪烟の怪 9. 白魚飯 10. 杜氏酒と美味と換
11. 織さん月代といふ事 12. 犬の奇事13. かしらん
ぼうの説 14. 烏が蛇を取りたる事 15. 人死したる時
最愛の子をとふ事 16. 蛇の事 17. 猿の事

18. 狐に学問したる事 19. 小出五郎右衛門遊をとらへし話 20. 大酒大食の話 21. 強盗早房弥助 22. 地五郎 23. 長瀬村音五郎 24. 滑稽の絵死人 25. 餓鬼に付かるるといふ事 26. 玉鬘子 27. 山家屋次郎が頭智の事 28. 仙境 包府伝播 29. 玉置縫殿が事 30. 大地雲の事 31. 与力の事 32. 彗星の事 33. こぼちといふ事 34. 歌よみて虜にせられたる話

(第8編) 1. 花に落花すると姿潤するとの別ある事 2. 古歌を詠ずる事 3. 定家卿秋夕歌の事 4. 六玉川とて世にもはや歌 5. 長歌よみはじめたるゆゑよし 6. 大式の三位が歌 7. 頌題と歌編輯論 8. 南茂樹があつめたる歌会の判詞書をはりて 9. 四季のはなし 10. 擬軍歌作歌 11. 盆石の歌 12. 堀田久平が製造する煎餅に鉛山の絵圖または七境五景などゑがくとて歌をこひければ 13. 朝ぼらけの説 14. 先師二十年祭記事 15. 岡本梅園が還暦の賀の歌の序 16. 一首十体の口訳 17. 歌詠みて罪を免るる事 18. 橋村淳風との贈答 19. 和歌御会始の事 20. はてとはさとの思ひちがひ 21. 松原久之が釣の歌非難を受けたるにつきて 22. 歌話片々 23. 岩代国吉津市次郎がこへる五ノ井喜八翁八十八賀歌巻序

24. 小野直被流恩城国時流和歌ノ説
(第9編) 1. 水害記事 2. 戸籍及種族の改称 3. 室澤 4. 七度半の使 5. 高山寺多宝塔勸化の事 6. 慶長六年辛丑正月浅野左衛門佐知行村高亨 7. 千里浜遠干潟となる事 8. 橋杭岩に埋没御影石事 9. 馳走といふ事 10. 杜鵑 11. 白蔵主の説 12. 干支の事 13. 弁慶が書きたる制札 14. 人の癖 15. 浦島子 16. 三品家に伝はりし家康公短冊の事 17. 閑浮の事 18. 熊野坐神社祭礼の歌 19. 加茂貞淵翁新学の説 20. 万葉集の事 21. 藤白鈴木氏の事 22. 越路の旅

(第12編) 1. 大酒をいましむ 2. 述懐 3. 春情有花鳥 4. 山水の画に題す 5. 除夜 6. 避暑 7. 富田川堤防復旧工事竣成式に 8. 野分 9. 新年経母の忌にこもりて 10. 簞 11. 筆 12. 悠ふかき筆売のはなし 13. 扇 14. 七草 15. 多屋梅窓葬場祭詞 16. 小山安吉還暦の賀に寄山祝はしがき 17. 湯川鶴が病中によめる歌のはしがき 18. 那須宗道葬場祭詞 19. 貝桶の説 20. 尚曲会の記 21. 擬軍歌今様数篇 22. 高崎正風氏帰京の後差越されたる歌 23. 小松内大臣と北条泰時

註1 柳田国男「山の人生」(「柳田国男先生著作集」第1巻, 1947年) P.42~43.

註2 「山の人生」初版は1926年。

註3 巻末の索引についてみるのに、瑛屋隨筆の項は「ア」の部にはなく、「ホ」の部に出て来る。おそらく「ボクオクズイヒツ」と誤読されたものであらう。

註4 これは柳田氏が直接「瑛屋隨筆」とよまれたのではなく、雑賀氏が1925年雑誌「伝説」に収載せられていた記事を抄録して柳田氏に報告せられ、柳田氏はこれを「アサヒグラフ」1925年1, 2月号に連載した「山の人生」に引用し、さらに翌年単行本としてまとめられたもので、この間のいきさつを雑賀氏は「瑛屋隨筆をよみて」(「瑛屋隨筆」第12編巻末所収)にくわしく記されている。なおこのころ柳田氏は、「瑛屋隨筆」中の民俗の記載だけを出版してはどうかと、雑賀氏にすすめられたが、これは結局実現せずじまいだった。

註5 「瑛屋隨筆」の謄写も既に第12編に及び、これにて遺稿の約三分の二を採録したことになる。併し草稿の整理十分ならざりし為、頗る統一を欠き難雑なものになって仕舞った事を遺憾とする。実は弁慶事蹟考、女百人一首、悲哀百人一首などは来瑛元瑛屋隨筆のうちに入れてなかったのを、私が将来保存の便宜上、之を瑛屋隨筆中にまとめてしまったのであるが、今から考へると、之はむしろ瑛屋叢書とでもして、其中に瑛屋集も瑛屋隨筆もその他のものも包含せしめた方がよかったかもしれない。未採録のものの中には、紀伊国和歌集1冊(之は紀伊熊鷹土記の和歌を抄出し之に他の和歌集のを追加せるもの)三十六人撰後六口撰新三十六人撰に対する愚按評及秀歌一冊、豊太閤論一冊及び歴史隨筆中からの書抜数冊などあるが、之等の謄写は暫く他日に譲り、今後瑛屋集の整理に従事したいと思ふ。(下略)」(宇井縫蔵「編輯後記」瑛屋隨筆第12編F.48)

註6 本節註4 参照

註7 たとえば、雑賀貞次郎「神隠の語」(「民俗学」2の9, 1930年)に天狗の説が抄出され、また岡田氏編「白浜湯崎の諸文獻」(1941年)には、「牟婁温泉考」および「牟婁郷名勝誌」からの抄出、白浜をうたった和歌15首などが収録されている。また、第1編「神武天皇御東征御須路考」は「大八洲雑誌」156, 157, 158 (1899年6月—8月)に連載された。

註8 これまでの考察で明らかなように、叢書にいうと題名のない3, 7, 8, 9, 12の各篇だけが元来の「瑛屋隨筆」であるともいえるが、本稿では編

集者の意志を尊重し、その分類・配列に従うことにする。

4

「瑛屋随筆」の全容は前節に表示した通りであるが、それぞれの題目からも推察せられるように、民俗に関する記述は主として第7編に集められている。それでここでは主にこの編をとり上げて考察してみたい。

この編は他の諸編に比して分量の点では多くはない^(註1)が、「大正中年以後に盛んになった俚俗、民謡、方言のことなどを、既に明治^(註2)に多く書き止めてあられ、中には所謂民俗学徒たちが、最近に注意しはじめた大酒、大食の語にまで及ばれてゐるのである^(註3)。」こういった点から考えて、宇井可道は民俗研究の先駆者としての役割を果たしているものと思われる。

宇井可道の民俗研究の重点がどこにあるかを考えるために、日本民俗学において目下採用されている^(註4)民俗資料の分類によって分けてみることにする。念のために表記すると次の通りになる。

〔第1部 有形文化〕 1. 住居 2. 衣服 3. 食制 4. 漁業 5. 林業・狩 6. 農業 7. 交通・交易 8. 贈与・社交 9. 労働 10. 村組織 11. 家族 12. 婚姻 13. 誕生 14. 葬制 15. 年中行事 16. 神祭 17. 舞踊競技 18. 童戯童謡

〔第2部 言語芸術〕 1. 命名 2. 言葉 3. 諺・諺4. 民謡 5. 語り物 6. 昔話 7. 伝説

〔第3部 心意現象〕 1. 妖怪・幽霊 2. 兆・占・禁・呪 3. 民間療法^(註5)

上の分類に従って、「瑛屋随筆第7編」の各章を分類すると、次の表のようになる。

第1部	1	
	2	
	3	
	4	
	5	
	6	
	7	
	8	
	9	
	10	
	11	
	12	
	13	
	14	
	15	
	16	
	17	
	18	
第2部	1	
	2	17. 猿の事33. こぼちといふ事

第3部	3	11. 織さん月代といふ事 25. 紙鬼につかれといふ事
	4	10. 杜氏酒と美味と換 18. 狐に学問したる事 19. 小島五郎右衛門理をとらへし話
	5	20. 大酒大食の語 21. 強盗早房弥助 22. 姥五郎 23. 長瀬村音五郎 24. 滑橋の怪死人
	6	26. 玉子 27. 山家屋次郎が頭智の事 28. 仙境の僧伝播 29. 玉置縫殿が事 30. 大地震の事 31. 与力の事 32. 彗星の事
	6	34. 歌よみて唄にせられたる話 14. 鳥が蛇を取りたる事 16. 蛇の事 9. 白魚飯 4. こべひのふしぎ 5. つばめのまきはは
	7	7. 安珍清姫が事 12. 犬の奇事
第3部	1	1. 天狗の説 2. 狐の語 3. 兵生の松若の事 6. 海幽霊 8. 清水浜臣が遊京漫録に白髪畑の怪 13. かしらんぼうの説 15. 人死したるとき最愛の子をとふ事
	2	
	3	
	4	

上の表でみると、「瑛屋随筆」第7編の性格は明らかに昔話集というべきもので、「遠野物語」^(註6)などとよく似ているが、それよりも一つ一つの話の内容が豊富で、かつよく分類整理されていることは、本書の成立時期から考えて驚くべきものがある。近頃の民俗学の調査の際資料として集められるのは第1部が最も多く、全体の半ばをしめる場合が多いのに対し、本書では第1部を全く欠いていることは、民俗学初期の傾向^(註7)と一致する。

紀州に関する明治大正期の民俗研究としては、まず南方熊楠の「紀州俗伝」^(註8)をあげることができる。これは南方熊楠が、「小生の紀州俗伝は、民俗学材料とはどんな物共といふことを手近く知せん為め書き出せし也」^(註9)という意気込みで書いたもので、主として身近の伝承を収録している。彼は博覧強記であったが、伝承・口伝等についての資料は間宮神社^(註10)の神官であった夫人の父から得る所が多かったらしい^(註11)。

なお大正末に森彦太郎「南紀土俗資料」(1924年刊行)^(註12)があり、これについて、昭和初頭に、雑賀貞次郎の「牟婁口碑集」^(註13)がある。この書は、紀州西牟婁郡、とくに田辺付近の民間伝承を集めたもので、この点「瑛屋随筆」第7編と似た性格をもっている。けれども「瑛屋随筆」がもっぱら伝承の収集だけに終始するあるのに対し、「牟婁口碑集」は伝承以外に、牟婁地方^(註14)の年中行事や民謡等を収め、内容が多彩になっているのは、「瑛屋随筆」より「牟婁口碑集」に至る約20年の間における民俗学の発達を反映するものであろう。

註1 宇井縫蔵編集本では47字18行詰で54ページ
註2 第7編成立年次は明瞭でなく、聞いたり思い出したりするままに多年にわたって書き続けていったもので、宇井縫蔵が編集の際民俗的なものを集めて1冊にしたものであろう。各篇が書かれた時期

は従ってそれぞれ異っているが、すべて明治の頃のものであることには間違いない。成立年次のわくを考えるために、年代の記述のあるものを次に挙げる。

1. 「天狗の説」 文中に今は明治28年とある。

4. 「こへびのふしぎ」 } 明治23年5月「かなのてかみ」第47号にのせたものと記している。

5. 「つばめのまははは」 }
8. 「清水浜臣が遊京漫録に白髪煙の怪」 浜臣が和歌山にきた文政3年は今から81年前と記している。文政3年は1820年だから今は1901年となる。

24. 「滑稽の絵死人」 明治37年(1904年)に絵死した人の話をとり上げている。

25. 玉鉾子 今は明治39年(1906年)と書いている。

上記によって考えてみるのに、本書はだいたい明治20年ごろより、40年ごろにわたる20年ぐらいの間に書き継がれたものと考えられる。

註3 雑賀貞次郎「瑛屋隨筆をよみて」1936年。(「瑛屋隨筆」第12編所収)

註4 前掲「民俗学辞典」F.596に採用されているこの分類は暫定的なもので、将来の修正改訂を予期するものとされているが、今なお行なわれているものなので、この分類に従う。

註5 同書 F.596

註6 柳田国男「遠野物語」初版 1910年。改訂1935年。この書の出たころの重要な文献として、柳田氏の「後狩詞記」(1909年)「石神問答」(1910年)があり、三者それぞれ後の民俗研究の三つの基本的な方向をうち立てたものと考えられる。「瑛屋隨筆」はその中の説話、民間信仰等を主な内容とする「遠野物語」の類型に属するものと考えられるが、これよりも古く1890年代から20世紀初頭にかけて記述されている点が、この書の民俗学史上に占める位置を考える際のポイントとなると思う。

註7 たとえば、大正中の業績として、柳田国男「神を助けた話」佐々木嘉善「ザシキワラシの話」早川孝太郎「オトラ狐の話」など。

註8 1913年より1917年にかけて雑誌「郷土研究」その他に連載。後にまとめられて「南方隨筆」の一部として公刊された。「南方熊楠全集」第5巻(1952年)には、これに補遺として1912年より1932年にかけて各種の雑誌に発表されたものを追加している。

註9 1914年柳田国男氏宛書簡(「南方熊楠全集」第11巻)F.163

註10 「祭神伊邪那美尊、又新熊野と称す、本村(淡村

= 現田辺市)字神田に鎮座す。県社にして田辺町の総産土神なり。」「(宇井可通「牟婁郷名勝誌」)この神社の例祭がいわゆる田辺祭りで、「牟婁口碑集」P.174~186に詳細に紹介している。

註11 平野威馬雄「博物学者、南方熊楠の生涯」(1944年)P.176~177

註12 断片的な事項を羅列したものだが、土俗篇と方言訛語篇に分け、かなり系統だっている。1924年、私家版として刊行された。

註13 雑賀貞次郎「牟婁口碑集」は、1927年熊辺叢書の1冊として刊行された。

註14 「田辺付近は元古の牟婁の地である」(牟婁口碑集「巻の初に」)とあり、著者はもっぱら田辺付近を考えられているが、地理的には牟婁とは田辺を西端とし、東は遠く尾鷲あたりまでを含む広い地域の名称で三重県に北南、和歌山県に東西の牟婁郡がある。

5

以上考察した所により、「瑛屋隨筆」こそ紀州における国学つまり本居大平系国学の流れをくんで、近代的な民俗学への橋渡しの地位に立つものであり、また封建時代の「紀伊統風土記」の延長の上にある、民俗学的な処理を経た「紀州俗伝」「牟婁口碑集」等紀州民俗学研究の先駆的業績の先導的な役割を果たすものということができ、民俗学史あるいは民俗学前史上確固たる地位を保持すべきものといわねばならない。こうした事実を見逃している点で、現段階の紀州民俗研究史は不備の点が多いこと前言の通りである(註1)。

なお「瑛屋隨筆」第7編完成を1907年(明治40年)と仮定して、民俗研究史上における位置を考えてみると、これは日本民俗学研究のはじまりといわれる雑誌「郷土研究」の発刊(註2)された1913年より古いが、坪井正五郎の指導にかかる人類学の分野での土俗研究はすでに、1886年東京人類学会機関誌「人類学雑誌」に土俗調査報告が出されており、つづいて鳥井竜蔵の主唱にかかる土俗会は1887年を第1回として各地の習俗を研究し(註3)これに属して南方熊楠の活躍がはじまることになる。「瑛屋隨筆」第7編は時期的にはこのころより書きはじめ、1906、7年ごろまで書き続けられたものと考えられるが、こうした中央の動きとはあまり関係がなく、西洋の学問の方法論的な影響は見受けられず、全面的に国学的な流れの上に立つものと考えられる。

その聞き書の正確さや、習俗・伝承等の処理の巧みさは天性と熊代素里よりうけた学問のたしかさによるものといえる。大正初年になって日本民俗学が築き上げられる頃にはすでに類縁の域に達していたため、そうした方面よりの影響をうけずじまいだったのは、まことに残念なことであった。それにもかかわらず、このような高度の内容を盛り得ていることは「瑛屋隨筆」第7編成立の時期から考えて驚くべきものがあり、大きな先駆的意義をもつものといえよう。

なお、本稿の性質上民俗研究以外の宇井可道の業績に対する検討は別の機会に譲るが、第3篇に「祈雨の事」^(註4)のように、民俗の記述とみられるものがあるが、後の編は編名を冠しないものにも、民俗的なものは第7編以外にほとんどみられない。これは宇井縫蔵が編集の際、内容を分類してまとめたからである^(註5)。

念の為に、「瑛屋随筆」の各編を分類してみると次のようになる。

〔歴史〕	1, 10	〔地誌〕	3, 4
〔歌学〕	2, 5, 6, 8	〔雑録〕	9, 11, 12
〔民俗〕	7		

この表からも、宇井可道の学問の中心は歌学にあったことがうかがわれ、それはまた宣長以来の歌学の伝統のあらわれとして興味深い。そしてこれは、宣長や大平のころとちがい、既に近代に入って後のものである点から、第1編の神武研究と併せて改めてその時代を背景として究明する必要がある^(註6)。とに角、宇井可道の学問は、歌学にしても、古典研究にしても、また民俗研究にしても、中央の学界ないし文壇とはほとんど没交渉に、完全に江戸時代国学の延長の延長の上にあるもので、この点南方熊楠のそれとも傾向を異にするものである。

註1 本稿第1節参照。

前掲「日本民俗学大系」第11巻P.153—157

註2 前掲「民俗学辞典」P.587

前掲「日本民俗学大系」

註3 前掲「民俗学辞典」P.589

前掲「日本民俗学大系」

註4 「祈雨の事、田舎に於て旱の時、雨乞するに火を焚き簀笠を着て「雨ふれかへるでしづくたれるもり」と一同高声に呼ぶ慣行あり。禁秘抄祈雨の段に先ニ以蔵人令私神ニ泉苑承仰行向集人先池ノ辺石水漉^{ツツ}高声一同云、雨夕^{ツツ}海滝王^{ツツ}とあり。此訛伝なるべし。…(下略)」

註5 「今後は一冊にまとめたものは別として、其他の短篇は、歌話、伝説、史談、其他などに分類し、成るべく執筆の年代順に採録するつもりである。」(「瑛屋随筆第3編、宇井縫蔵編輯後記」)

註6 各編末の編集後記を見ると、第2編は1890年ごろ、第5編は1910年、第6編は1910年頃、第8編は1904年頃の作にかかる。第1編は1899年雑誌に発表。

6

本居宣長の国学の成立において、徂徠学の影響が大きかったことは、早くより村岡典嗣氏によって説かれ^(註1)また村岡氏よりさらに積極的な意見が、津田左右吉氏によって述べられた^(註2)。また丸山真男氏は、宣長学は徂徠学と思惟構造の本質的類似性という地盤の上に、朱子学的合理主義が徂徠学において最高度に開化し^(註3)、そ

の成果が儒教そのものの本質的な性格から来る最後の制約が除去され飛躍的な発展を見ることとなったものとされる^(註4)。

たしかに近世後期にいたり徳川封建制解体過程の進行につれて重要性を増した被治者教化の必要は、当時の政治あるいは言論上の指導者クラスにとって当面緊急の必要性を持ち、本居宣長の国学はそうした必要から生れたもの^(註5)といえる。こうした見方をもってすれば、国学は古学派と基本的に同じ思惟方法に立つものと考えられる。

だがここで問題にしたいのは、そういう根本的な思惟態度の上にあらわれた具体的な学問の姿である。この点について宣長学を特色づけるのはやはり契沖以来の歌学の面にもっとも強くあらわれた文献学の伝統であり、そしてこの伝統は真淵・宣長・大平・内遠とつらなるものであり、この系列と近代の民俗学との連繋が少くないことをここに指摘しておきたい。

村岡典嗣氏によると、宣長の国学においてははもとも「行とどいた理解と、豊かな人情味と、而して明らかな微智と、而してそのおくに更に、歴史の長い相に於いて万事を觀るという落着きと……加え、態度に有する一種の自由さというもの」が見られるものであるとし、西郷信綱氏はその原因を「当時の政治的現実を儒学のように危機的実践の対象とは感じてはいなかったからである。」^(註6)とされているが、筆者はこの点については同意できない。政治的現実の危機を感ずるかどうかというこれではなく、危機解決の態度のちがいであるというべきだと思う。そして宣長においてあるがまゝの現実を肯定することを教えたことは、そこに宣長の封建制擁護の立場を明確ならしめるものだが、被治者の心情を重視し、現実を見るという態度は、所謂封建秩序の擁護に役立つ趣旨をもっていただけれども、一方では民俗のありのままの姿に目を開かせることになったものであろう。

そう考えて来ると、紀州藩国学が宣長学における歌学の面を継承したことは意味が深い。もともと契沖以来、国学においては和歌の風雅に心をよせる面が強かった。この点における国学の非政治性は決して非政治性そのものでないことはさきの松本氏の所論^(註7)に見られる如くであるが、顕われた形において見る限り、やはり宣長は「私有自楽」の道たる和歌の風雅^(註8)を身近に見る点があり、この点と民俗的関心とは、宣長系国学に関する限り無縁のものでないことは、本居大平より宇井可道に至る系列において一貫して見られる所である。本居大平は「古学要」(1809年)で、「中むかしまで、古学といふ事はなかりしかども、歌をよむ事は神世よりつたへたる道にて、此歌の道にわがいにしへの道のつたはりしなり。古より歌をよむ事を芸能としてこの歌学びの筋につ

けてかつかつ古をも学び詞の意をもつたへましたる事歌学の筋にのこれりしは幸とも幸にてよるこぶべき事なり。^(註10) といって歌学をもって神代以来の古道であるとしている。その系統を引く長野義言^(註11)も歌の本質である実情を欠くことの不可を説いている^(註12)。

そして和歌が「朱子学を思想的武器とする徳川封建制の崩れゆく隙間を縫うて、「まごころ」と「まこと」を旨とする新しい人間性を自覚されつつあった」^(註13)ものとすれば、民俗的関心も新しい人間的自覚の主体たる個人の周囲にあるものとして、その主体の歴史なり実態なりを知るための資料としての価値を持って来るのではなからうか。また歌学のための言葉の研究、つまり語学が方言・民謡研究の面に発展することも考えられ、たとえば鹿持雅道^(註14)の「巷謡篇」「謡多方言」をあげることができる。

国学は元来文献学であった。宣長学においてはその土台の上に歌学や道学が支えられていた。文献学は歌学を主体として、道学をも矛盾なく内在せしめていた。しかし篤胤学においてはこの趣は変わった。宣長においては不可知論は文献学により支えられていた^(註15)が、篤胤学においては、不可知論は文献学から離れてそれ自身の観念的体系化へと進行し、神霊的な世界に突入した^(註16)ものである。篤胤自身、神霊の告を夢幻の間に見ることもあったという^(註17)。このように篤胤学においては宗教性が強く、その門人で一派をたてた大國隆正は「近き世にいたり、その両部唯一ともにわが古道にたがへりといふ眼をひらきて、神道のまことをひきおこしたる人よりあり。聖倉春満、岡部真淵、本居宣長、平田篤胤これなり」(「学統弁論」1857年)^(註18) といっている。これを道統の祖として禪宗などの例にならって、初祖、二祖、三祖、四祖とよび、学神神号の一軸をものした。そしてこういうことは、平田派には一般に行なわれ、平田鉄胤^(註19)が書した国学四大御神号などもある^(註20)。

このような傾向を、前記本居大平と比較すると大きなへだたりがある。村岡典嗣氏はこれについて「平田学、殊に後年益々一家をなして後の業績にいたっては、決して之を本居学の発展として、之を同一性格の学問や思想と見なしえないのみならず、全く異質のものとなっている」^(註21) といっておられる。私見では宣長学と篤胤学は、少なくともその本質的なものに関する限り異質のものでなく、等質のものとするが、具体的な顕現においては大いに異っていること、これまで考究してきた通りである。

宣長学における学問的態度、文献学に根ざす歌学重視の方向、政治性を政治性として正面からとり組まず裏返しに見る態度、これこそ宣長学の基本的な行き方であって、この伝統が宣長の遺録をついだ紀州藩国学に引き継がれ、その後の封建危機の切迫化の中を、伝統的態度を失わず、政治的契機に根ざす「紀伊絃風土記」の編纂

等の場合にも、また大平・内田らの学問業績の中にも民俗的関心が顕在するのである。そしてまた、このような態度^(註22)こそ昔話伝説その他遺習資料を史料としてとり上げようとする民俗学の態度に通ずるものであり、有形の文献資料を判断の基礎として集めることから、無形の遺習資料への関心に発展するものではあるまいか。歴史事象を語る史料には遺文、遺形、遺習^(註23)の三つがあるが、これらの研究対象の構成態度には共通点があり、これが「歌学——文献学——民俗研究」^(註24)という三者の相関性をもたらすものと考えられる。

このように考えて来ると、本稿第一節において筆者の提示した疑問に対する解答もおのずから明瞭となる。ただこの際、本居大平系の国学が、宣長以来の歌学——文献学の面を進展させ、その継承の上に民俗学が樹立されたものか、それとも宣長の国学思想の中に本源的にあったものを、宣長以後断絶があって後、近代に入って再発掘したものかが問題となるが、筆者の考えとしては前者を採りたい。

もちろん、新国学と呼称してみても、国学と民俗学との間には大きなへだたりがある。何とんでも民俗学は近代科学であるし、国学は封建教養の産物^(註25)であり、封建制を支持するもの^(註26)である。だから国学と民俗学の接点という問題に対しては、国学と民俗学との関連が、こうした社会思想として根本的な差異をもつにも拘らず、多くの共通点をもつものであり、「新国学」^(註28)の名の冠せられることから見て、果して根底的にいかなる共通点といかなる相異点をもつものかということをは明らかにしなければならない。近代日本人への精神的影響の面では神島氏「近代日本の精神構造」がある程度解答を用意しているようだが、民俗研究の封建時代における歴史的過程の面での考察は、なお今後に待たねばならない。

註1 村岡典嗣「本居宣長」この書の初版は1919年に出版された。

註2 津田左右吉「文学にあらはれたる我が国民思想の研究、平民文学の時代(中)」(1921年)、改訂版は「文学にあらはれたる国民思想の研究、第4巻」(1955年)

註3 この点に関する丸山氏の見解に対しては、中国と日本の朱子学の把握方法をめぐる守本順一郎氏の批判および江戸時代初期の朱子学を中国直輸入的な朱子学ではないとする田原嗣郎氏の批判などがある。(守本順一郎「近世思想史の方法について——丸山真男氏の所説の批判を中心として——」経済学論集21—4・5。田原嗣郎「荻生徂徠における朱子学の理解と批判」史学雑誌68編11号)

- 註4 前掲「日本政治思想史研究」P.164
- 註5 前掲「国学政治思想の研究」F.24
また心学についても同様のことがいえると思うが、その成立事情については別の機会にとり上げたい。
- 註6 村岡典嗣「玉くしげ・秘本玉くしげ」岩波文庫版解説、これは西郷氏前掲書より引用した。
- 註7 前掲「近世の学問と思想」P.317
- 註8 前掲「国学政治思想の研究」
- 註9 前掲「近世の学問と思想」P.319
- 註10 「増補本居宣長全集」第11巻「本居大平全集」(1938年)F.252。前掲「国学政治思想の研究」に前半が引用されている。
- 註11 長野義言(1815—1862)前掲「国学者伝記集成」P.1396参照。
- 註12 前掲「国学政治思想の研究」P.65による。
- 註13 前掲「近世の学問と思想」P.326
- 註14 前掲「本居宣長」P.485—488
- 註15 この表現は、西郷氏「近世の学問と思想」P.309による。
- 註16 前掲「平田篤胤研究」P.209
- 註17 「大岡隆正全集」第4巻、P.150。
- 註18 平田鉄胤(1800—1882)篤胤の養嗣子、篤胤の娘おてうの夫。1867年明治政府に任用せられ、翌年明治天皇の侍講になった。
- 註19 村岡典嗣「宣長と篤胤」(1957年)P.3—4
- 註20 同書 P.213
- 註21 柳田国男「史料としての伝説」(1925年「史学」4巻2号、1957年同名単行本に収録)
- 註22 和歌森太郎「国史における協同体の研究」上(1947年)P.21
- 註23 民俗学がいかなる種類の学問に所属するかを考えると、この相関性をたしかめるのに役立つが、広義の文化人類学に属するとみられ、また歴史科学としての面も持つわけだが、文献学もまた同様な系列に入ると考えられる。現にドイツではVolkskundeを文献学的=歴史学的科学philologisch=historische Wissenschaftに入れる学者もある。
- 註24 国学の性格については種々の見方もあるが、本稿所論の結果によりこう断言できる。
- 註25 西郷伯綱氏の考えはこれと異り、絶対主義王政への道を歩むものとされている(同氏「近世の学問と思想」F.357)が、国学本来の方向にはそのような進歩的意義を認めにくいことは、これまであげた論証によって明らかとなったと思う。
- 註26 前掲「新国学談、第1冊、祭日考」P.173—176

付 録 環 屋 随 筆 第 七 編 抄

以上で大体宇井可道の業績を中心とする国学と民俗学の関連に関する考察を終るが、参照の便の為、編中の主要なものを、第4節における筆者の分類に従って抄録しておく。

〔1〕 第2部の2「言葉」に関するもの

17. 猿 の 事

猿の千匹連といふ事あり。我牟婁郡山間にて百匹ばかりも連れたるは度々見たり。秋山田を守るころ、彼数百匹連の猿きたりて稲穂を喰ふ。故に仮庵をつくりて猪鹿と共に逐ふなり。彼逐はる時、稲穂を口に含み顔をふくらかし、なほ手足に穂を握りて逃るといふ。きびしく追いつけば、彼聯合して遠巻に人を巻こめ、近付て抵抗せんとす。故に此時は柴の中にかくれて顔をかくし居れば、之を見てまた逃るゆゑ、又柴の中より出でて逐ふなり。凡二里ばかりも奥山へおひ込めば当分は来らずと、仮庵守ものがたれり。

猿が山蜂を捕喰ふ事あり。山蜂(方言高麗蜂または熊蜂といへり)は奥山の高き木に巣をつくるものなり。我西牟婁郡長野村大字伏見野(註19)の山中に火なる巣ありて、猿が取り喰ひし事あり。猿は樹に登りて巣を動かすにぞ、蜂出でて猿を刺す。猿はこれをつまみておのれが毛の上にて揉みて喰らへりと、之を見たるものがたれり。さて七日ばかりあいだありて行て見たれば、はや喰ひつくして巣もなくなりしといへり(註20)。

33. こぼちといふ事

米価騰貴して窮民自活し能はざる時、米を買占むるものを憎みて、その家を破壊するをこぼちといへり。昔田辺江川町源中といへるものをこぼちたる事あり。彼は米の仲買せしものなり。安政五年八月月上旬奥熊野尾鷲浦(註21)に於て、こぼちすとて群集する人数凡千人許り、銘々掛矢、斧、鋸、熊手などを携へ、目ざす処へ押寄せ、掛矢もて役けども地震以来新築の家なれば、普請丈夫にて急に砕けがたし、依て斧もて柱を切り倒し、鋸もて挽などして難なく三軒まで破壊したり、醤油・燈油などの輪を切放ちたれば、道路に流れ出る事夥し。金銀は石臼にて搥砕き銀札は押切もて真二つに切り捨たり。扱六軒破壊する見込なりしに跡三軒は種々佗事して通れしと、皆土井何某の枝葉なりといへり。其原因をきくに此節米一石の価百五十匁迄騰貴し日々稼の小者共困難いふばかりなし。僅少の稼代をもつて米を買はんとすれども売るものなし。強てたのめは此方には米かくまひなしといふより、荒方なく居たりしに五百石他所へ積出したるにぞさてこ

そ前件の破壊にあへりといへり。右の米屋等は平生非道強敵の者なりしときけり。又此際長蜂に於ても十二軒こぼちたりと。これも米の買占めより原因せりといふ。こぼちとは我牟婁郡にいていへる俗言なり。京山の蜘蛛の糸巻にうちこはしといひて天明七年五月の蜂起を記してあり(註4)。

〔2〕 第2部の3、謎謎

11. 織さん月代といふ事

いつの頃にかありけん。田辺藩士何某の子に織衛とかいふて、性質さかしからぬうはめくひの人ありけり。ある日結髪許にゆきしに、人々つどひて種々滑稽漸しをせらる。ある一人がいはいく、月代するに水を濯がず髪を剃りなば、いかにそれこそいたからめと。そは得せまじきと皆々笑ふ。織公間居たりにし、すっと立ちてはいく、おのれなどは涙もなき事なり。男たるものその位の事は誰かせざらんやといふ。ある人いふ、さらば剃りて見せ候へと。織公すすみて床に坐せり。髪結あきれて曰、旦那少しは水にてしめしてはいかが。馬鹿をいふな、侍といふものは命さへ捨る事あるに月代位に恐れてすむものか、とく剃れといへば、髪結は止事を得ず剃りかかりしときく。それよりおのれが損失となる事、又は迷惑する事をもいはず、なし得ん事を好むものは織さん月代とあだ名して今にいひつたふになん(註5)。

25. 餓鬼につかるといふ事

俗に餓鬼につかる、まただるにつかるといふ事あり。だるは空腹つかるは疲労をいふならんか。おのれ廿四歳のころ、文久年間の末にかありけん。熊野坐神社(註6)祭礼に参詣せんと四月十四日私晩出立し、高原にて昼食する所から、堀林兵衛及森栗榮七弟安吉に出会ひ、道づれとなりて野中に至り、三人等しく弁当の残りを喰ひ、道湯川(註7)より三越峠に登らんとするに、何となく気疲れ足重く、道渉らねば杖を刀に漸く峠をこえ多数の参詣人に追越され追越されしつづ歩みしに、最早一步も進みがたく覚ゆれば兩人に対しておのれいふ、道湯川より空腹を覚えて気力疲労せるも、つとめて爰まで来つれども今は進み難し、最前三越峠の茶店の餅を見て買求めて喰んとおもひしかど、あまり野郎ならんとて羞抑へしなり。予は此処にてしばらく休息すべし、御兩人は先へ行き玉へといへば、林兵衛曰我も空腹に堪へがたけれど、是迄辛抱したりと、安吉曰、私も同様道湯川より空腹になり、三越峠の餅に心ひかれたれど、おのれのみやしく買って喰はんも耻しくおもひしので来れるなりと。林兵衛いふ、是はだるにつかれたるなり。まづ煙草でものんで休憩すべしとて、道路の傍に居並び、弁当行李を開き見るに、林兵衛の行李に香物三切あり、一切づつわけて喰ひ、夫より糞をふむばかりに歩みつつ、谷水を飲みて林兵衛又い

ふ、此行先柿原の茶店に至りて何にもあれ買ふべしと、それを力にして茶店にいたり、内に入て見れば六十許の老女あり、林兵衛空腹の事をのべて、何なりとも喰ひたしといふ。老婢曰、近頃茶店を廃業したれば、食物はなしと。林兵衛土突に釜のかかりあるを見て、此はがまに茶粥の残りはなきか、老女いふ、只今家内残喰したるあとへ水を入れたるなりといひて、老女は大豆を煎らんとす。林兵衛いふ、其大豆はいかに、老女苦しからず、おあがりなされといふ。三人よろこび大豆三合もとめて茶につけて喰ふほどに、大なる土瓶に茶二はいまで飲みつくしたり。是にていささか力を得、夜に入りて湯峯に至り、西善兵衛方へ投宿しぬ。温泉に浴したれど眩暈する様の心地すれば宿に帰る。扱夕飯は先客より膳を出すにつき我等三人は一番後回りなり。おのれ西善兵衛と懇意の中なれば、三人連れて台所に入り、空腹の事を述べて、ならべある膳を横取りして喰ふ。善兵衛の妻我に対して、其様にたべては身の毒なり。今はやめてまた後刻たべ玉へといふには、給仕する娘に、何碗ばかり喰ひしやと問ふに八九碗ほどはあがりしならんといひ、彼我大笑ひとなり、箸をさしおきたり。だるにつかるといふ、だるはひだるいなどよりおこりにや。

柳沢棋園(註8)雲萍雜志に、伊勢より伊賀へ至る道にて、予が行く跡より一人の男いそぎ来りていふ様、我等大阪の者なり。過ぎこし道にて餓鬼に附かれしにや飢ゑて一步も進み不申。大いに難波におよべり。何成とも食物の御持合あらは、少しにても給り玉へかしといへり。予心得ぬ事を申ものかなとは思へど、旅中別に食物のたくはへもなければ、刻み昆布のありしを、是にてもよろしきやととらせけるに、大に悦びて直に食したりき。予聞ふ、餓鬼のつくとはいかなるものにてあるぞといへば、答へて曰、目には見えねど、此あたりに限らず、ところどころにて乞食など餓死したる怨念その処に残り侍るにや、その念餓鬼となりて、通行の者に取附き侍るなり。是につかる時は、腹中しきりに飢えて、身に気力なく、歩行も出来がたき事、我等度々なりといへり。此若菜種を商ひ、諸国に注文をとりて常々旅行のみせしとぞ。世には左様の事もあるものこや。他日播州国分寺の僧に尋ねけるに、此僧申けるは、我若菜の頃伊予にて餓鬼につかれたる事あり、よりて諸国行脚せし折は、食事の時に、飯を少しづつ取りおき、それを紙などにつつまて袂に入れおき、餓鬼につかれたる時遣す物なりといへり。心得がたき事にぞありける(註9)。

〔6〕

18. 狐に学問したる事

日高郡山路村に武田何某といふ者あり。いつの頃にかありけん、永い間狐に憑かれてありしに、その狐中々の

博識と見えて、何某は天文官の男なりしに、相当の書籍も読めるやうになり、知識もまして後、狐は除こりしといふ。明治十年の頃我西牟婁郡のある村の小学校教師となれりしが、なほ本気とも見えぬところをりあり。こは素よりの本性なるが故に、狐も悪きしならん^(註10)。

19. 小出五郎右衛門狸をとらへし話

田辺藩士小出五郎右衛門は、和歌山常勤にてある処畑屋敷とか聞きしに忘れに居住せり。ある寺の門前に、狸の女に化けて人をたぶらかす事はかねて聞き居たりしに、折ふし夜更て其処を通りかかりしに、門前に一人の女笑顔をづくりて立ちあるにぞ、いざいざわれにともなへといへばより来ぬ。その手をとて途中連帰るに、何といふも其手を放さず、我門前に束り、内より門をひらかせて、引き入れんとするに、彼入らじと争ふにぞ、無理に引入れて門をささんとする際に、捕へられたる手を振もがき、門外に飛出て逃去りしといふ。其頃畑屋敷のある屋敷に、毎夜狸出てさまざまの奇怪をなす。ある夜行燈に足出来て追走行などせしに、またの夜その奇怪をするとき、数人して障子をたてきりて、刀をぬきて切りまはるにぞ、彼其障子を蹴破りて逃去りし後は来らざりしとの事を、小出氏の親戚のものより聞得たり^(註11)。

20. 大酒大食の話

平田篤胤翁気吹舎筆談に、石原正明^(註12)に聞くに、尾張の国にて甚く酒飲む人あり、為隆といへり。名古屋の里にて狸々会となづけて、数多の酒のみ共集ひて飲くらべけるに、此為隆は九升六合其次何某は六升のみしとぞ。ある時名見屋の里に旅人ありて、宿主にいひけるは、おのれ酒好む者なるが、国を出しよりいささか勞る事ありて飲み侍らず、今日は心地もよければ酒盛して旅の愛ひを慰めんとす、此里に大酒飲む人は侍らずや、招き給はれかしといふ。宿主為隆許ゆきてしかじかといふ、折よく事なくて侍れば、参り侍はんといへり。旅人いと悦びて、よき酒壺斗肴もうまき物とのへて待つほどに、為隆入来りて呑むほどに、壺斗の酒はのみはして、又五升をも二人して飲居たれ共、さばかり甚く酔たりとも見え、為隆は帰りに、其明る日酒肴を持て旅人屋に至り旅人を訪ふに、彼旅人いまだ起出ぬほどなりしかば、為隆はのみ勝けりとほこりしとぞ。又平田翁秋田にありしほど、杉山本念寺といふ寺の法師若かりし時、七八升ばかりの餅を喰ひけりとぞ。此法師は餅を喰ふといはず、呑むとのみいひけるが、翁十六七歳のころ七十に近かりけり。或時翁の父の間給ふに、餅のむ事も昔とは変りたらんといへば、いたく年よりてこよなく劣れり、されど三四升は残し侍らじと答へぬ。さらばとて餅つかしめて与へければ、法師悦びて大根のしぼり汁のみ掛けて、見る

が間に四升余りの餅を喰ひたりとあり。

おのれ上三栢村にありし時、昼夜出入する男に永吉といふ者あり。大食の名たかし。ある日中三栢村某が素屋根ふきに雇はれしに、かねて大食の聞えあれば、ためし見んとて、白米五合を茶粥に焚きおき、永吉の来るを待ちて曰、家内はとく朝食くひたれば、是は喰残りなり皆喰ひ給へといへば、永吉然らばとて喰ひつくしたりとて、更に評判となれり。おのれ若きころ蜜柑畑に行きて蜜柑を採る折ふし所用ありて永吉来り蜜柑を乞ふ、採りて喰ふべしといひければ、荐りに喰ひて後、あゝ少々喰ひたりして帰る。其跡を見れば皮いと多し、その数をよみたれば八十余あり。その後聞けば蜜柑皮のままにても五十位は喰ふとの事にて、八十余の数は彼が為には充分ならざりしなり。また同村に新六といふもの大食の名あり。早魃のころ、昼夜水取りして、夜食に麦茶粥六合づついつも残らず喰へりといへり。さらば永吉が五合の粥はなほ彼が為には大食といふにはあらざるべし。おのれ方にて食事するには当人の二人前位よりは喰はざりしは、余程つつのみたるならん。また同村に法次郎といふもの極めて素麺好にて、壺貫匁の素麺に川鮎一ぼて大なる鮎十尾さしたる添てくはしめくれば、何時にても喰ひつくすべしといへりしに、ある秋縁家の神盆に参りて、素麺壺貫匁ゆでて彼に洗はしめたるに、あらひつつ喰ふほどに、遂に半すぎまで喰ひたりといへり。また中三栢村に六平といふ者あり。此者朝登升の飯を喰ひたれば、七八里の所へ行て帰くるに、夜にいたるまで、其間に喰はず。よって一日がけ他出するに弁当を持たる事なし。すべて農家の者は平生大食す故、たまたま赤飯餅など壺升位喰ふものは珍しからざるなり。

また和歌山皇典講究所支那部員に秋山何某といふものあり。一日に酒五升を飲むとの事を聞きしに、折ふし田辺に來り関鷲神社々司田村家造と同道して郡衙に來れり。おのれ面接して帰るに際し彼今朝は飲まずと田村にとへば、膳先にて二升のみて來りたれども、あの如く酔たる体も見えずといへり。実に五升は苦もなき様子なりし^(註13)。

〔3〕第3部の1. 妖怪 幽霊

1 天狗の説

天狗は深山に棲み形は人間の如くにして鼻高く翼ありて飛行するものをいへり。方言狗寶、空神、鼻高などいへるなり。

一和歌山藩士に間宮一八といへる鉄砲家あり。熊野に來り、夜中本宮より湯の峯に行く。車坂にかかりしに杉の梢に人声あり。之を聞けば、近頃和歌山より間宮一八といふ鉄砲の名人來れりと己の事をいへるなり。其声を

目的に発砲せしに何の動揺もなく静まりぬ。初湯ノ峯にて入湯中、ある夜更て湯に入りしに、大入道入沐あり互に挨拶し深夜に入湯する事を問ふ、彼入道曰近此腕に疵を受けたれば之を治癒せんが為なりと。問宮氏思へらく、彼必ず此程車坂の怪物ならん。若し敵対せば短刀にて仕留めんと心に覚悟を極めつれども、彼又別に異状なし、別れて旅宿に帰りしに、其夜より旅宿の震動する事恰も地震の如し。旅宿の狼狽一方ならず、大地震なり立退かんといふ。問宮氏笑ふて車坂の始末を語る。宿主大に恐怖して同氏の滞留を断りしとなり。其後同氏は新宮に至り神ノ倉に通夜せんと上りしに、夜更て麓の方に杖の音聞ゆ、同氏思へらく、此神倉は日の七つ時より上るものなしと聞きつるに、今来るものは例の怪物ならんと相待つに、近く寄り来るを見れば、日比和歌山にて按摩せしめたる盲法師なり。何英かといへば問宮の旦那かと答ふ。互に爰に来れる事を問答せしが、法師の曰く久し振にて一揉仕らんと、後に回り四方八方の雑話中肩を掴むこと追々暴し、柔らかにといへば少し柔かにするかと思へば又暴し、斯する事、三回目には一向暴々しければ振返り見るに、大の入道眼を恐らし突立っていふ。汝此の神ノ倉は日の七つ時より漫りに登らざる慣行なるに、之を犯して来ること不届なり。早く下山せよ再び犯す事を許さずと、問宮氏其理に伏して下山せりと。評して曰く湯の峯のは天狗なり。神ノ倉なるは則神ならんと。此事はある雑誌にて見たる様思ふに今考へ得ず。予小児の比父兄の物語りを聞きつる儘を記す。

一 西牟婁郡三栖村大字上三栖に米作といふ者あり。ある晩方、字坂口といふ処へ行くとて、上ノ宮一合神社へ合い併、今ハナシの前を通りかかりしに、石段に白衣を着たる六部あり。米作を呼止め背に負はれよといふ。米作之に従ふ、目を閉ぢよと示し、風起りて飛行し、長野村大字上長瀬と伏見野の境、芦谷の岩倉に至り、此所は大倉なりと示す。又飛行して新宮神ノ倉に至りて見せ、それより諸国を逡巡して至る所を示せり。村方に於ては米作が勾引されしとて鉦大鼓を敲き櫓の歯をもて枅の尻を搔きつつ、二晝夜ばかり搜索せり。彼六部米作にいふ、今姑らく連行きたけれども村方にて荐りに尋ねたれば一先帰れとて、坂本といふ処に茶置置たる上に仰し去れり。友八といふ者其音を聞き走りゆきて捕へたり。甚く疲勞せしと見えて二三日間は目を醒さず。其勾引せられたる始末を問へば、前件の如く答へしとぞ。食物を問ふに握り飯又は餅菓子など喰へり、尚袂に残りありといふ。之を見れば皆柴の葉なりしと。友八は予の従姉の嫁したる男にて、小児のとき予之を知れり。今より考ふるに凡六十年明治二十八年より計以前なり。

一同郡岩田村大字岩田字立に万蔵というもの、ある日家内に口論し腹立たしき儘、ふと家を出たるに、白衣を着たる山伏体のもの向ふより招く。其処に行きたれば、背に負はれよといふ。負ると其儘飛行し日高川上流川添村大字市鹿野に至れり。村の者人形芝居をせんとてかくや樂屋を掛けあり。彼曰く日暮ならば見物せしめんに日高ければ行くべしと飛去れり。家族は万蔵の帰らざれば荐りに搜索す。村方の者聞付け追々集来り手分をして遠近を尋ねらる。三日目に至り同人宅の後なる金刀毘羅社境内の笹原動きて音するものあり。万蔵妻之を見付け直に行きて捕へたるに、酒臭きこと甚し。疲勞の体にて二日間ばかりは高肝をかきて前後も知らず。目覚て後其始末を問へども定かに答へず。若し之をいふ時は空神様のお叱りを蒙るといふ。其帰り来りし事を問へば、家内や村方に荐りに尋ねをれば今度は帰るべし。又腹立ことや氣に喰ぬことある時は、何時でも家を出て招けとの事なりといふ。其酒気ありし事を問ふに、七月十三日（陰曆）夕方摂州西宮にて大群勢集し酒呑む席に交りて呑めりとなり。其以後万蔵農事に出でて折々膝を屈めて礼拝することあり。其故を問へば空神様の御通りなりと。他人は之を知らざるも本人には目に見ゆるものならん。是は万延文久元治の間の事にて今より凡三十余年明治廿八年より前の事なり。予安政の比岡村福田兵助、改所英次郎等に誘はれ、万蔵宅にて浄瑠璃を語りし事あり。それよりは後の事なれども今其年暦を忘れたり。

一 今を去る凡七八十年以前同郡稲成村元伊作田蓼岩いさだりさいわの上に女の髪を振亂して立てるものあり。柴刈のもの之を見付け取調べたるに、伊勢国の人なり。旧田辺藩より命じて伊作田村より同国へ送せしめたる事あり。同所万代記に記載する処にして其年暦を忘れたり。（後略）（註14）

2. 狐の説

（前略）

一 天保の末弘化の頃西牟婁郡中三栖村に勇蔵狐と稱する狐あり。ある日諸岡修業の六部来りて勇蔵方に宿かりしに、桐の箱を取出していふ。此神を信仰する時は、万事思ふ事叶はぬはなし。且富貴繁昌するなり。かならず箱を開くなかれといひて去りぬ。勇蔵が妻此箱を得てより、奇妙の名高く遠近に聞え、参詣するもの夥し。日々賽銭の落る事五十匁に下らず。勇蔵俄に徳分付たり。同村に岩蔵といへるものあり。何時の間にか其箱を開き見つるに、極小き雌雄の狐の面ありしとなり。夫より奇妙もややおとろへて参るものもなし。狐は箱よりいでて繁殖し遂に数十疋の眷属となれり。隣家に宇右衛門といへるものあり。獣を銃殺する上手なり。折節男狐の通ふを打殺し、又ある時女狐の左の眼を掠れり。故に此女

狐の恐く人は左の眼しかみて涙出るなり。彼女狐人に悪く度にいふ、おのれが夫は宇右衛門に銃殺せられ、おのれ又眼に疵つけられぬ。此恨を晴さんとすれども彼耳敏くして近寄れば、何者か来りりとて起上り油断なければ恨を晴す折なし。ある日彼牛を繋ぎたる時高峯より牛を落して角を折らせて少しは腹癒ぬ。夫死して後野狐を夫としたれどいと疎し。闇のとぎせしむるまでなりなど口ばしれり。

一 弘化四年夏の頃予が弟に仙助とて三歳なる小兒天然痘にかかり大患なり。勇蔵^{いづみ}狐つく。ある日予寺小屋より帰り膳に向ひ饅頭の生節を菜とし夕飯を喰はんとす。板の間に小さき穴あり。其穴より鼠出来て箱膳に上らんとす。予箸にて追ひつつ飯を食ふ。鼠こりずまに上らんとする故、予大声をあげて家族に告ぐ。家族等来りて夫こそ狐よとて大勢立騒ぎ、二疋の犬を床の下へ追入れ鉄砲を打込、高竿にて床下の隅々を突たれば、鼠は件の穴より飛出んとするとたんの拍子、出刃庖丁にて突たれば、床下にかへりコンコンと二声叫びたり。とかうするうち日は暮れぬ。奥の間に患者に添添して伏たる看護婦が蒲団の下に毯を包みたるごとくふくれあがり。これを押うればむくむくとして一疋の鼠出て神棚の後ろにかくれたり。此を捕へんと袂を立切り神棚を下ろし追廻る透を潜りて、次の間の縁に出て、桁にのぼり廻り縁の方に逃行き、戸袋より飛下りて又次の間にかかり、長蔵といふ者の胸元までかけ上り。長蔵はつと大声をあげたれば鼠は台所^{だいし}にかけゆきて柱より桁をつたひ味噌部屋に移り、味噌桶の後の壁にて大なる蜘蛛に化して這ひあがり、屋根を越んとする時は又鼠となれり。其夜鉄砲に玉薬をこめ、スハといはば打簾かさんとしたるに、翌朝見れば火皿に小便をそそぎかけ口火の立たぬやうにせられたり。幾程もなく小兒は死亡し身体温気もなくこと切れたるに父君は尙死体を抱きて居玉ひしに、其死したる小兒の眼を開き、手を出して痘瘡を取り喰へりといへり。実に奇怪のものなり。其年天然痘大に流行し、狐憑の爲に取殺されたるもの多し。田辺藩役人出張して取調べたる書類あり。此を謄写せんと搜索せしに、王政復古の際旧記は悉皆藩庁に引上げられし故、今は尋ねるに由なし。

一 生馬村^{いくま}に谷本良助といへる医者あり。度胸のある男なり。ある時子に狐憑り口ばしりていふ、赤飯を振舞なば帰らんと。故に小豆飯を焚きて握り飯とし、魚を添へ之を携へ其子を連れて、岩崎村の境まで送りゆき、件の赤飯を取り出し狐に示していふ。おのれには赤飯は似合ぬぞ、早く退き去れ、赤飯は我が喰ふぞといひて皆喰ひ尽其せり。夜更て岩崎村より帰らんとするに跡より行角燈

出て送り来る。立止まれば行燈も又止まり、歩めば歩みて、生馬村福田大五郎が家に至り大五郎を呼び起して角行燈の送り来るを見せたりと。こは大五郎より直接予が聞得たるなり。

一 岩田村に音吉といふものあり、その子に狐憑り赤飯を振舞なば退んといふ、乞ふがごとく小豆飯を焚き小き赤魚(ヒメチといふもの)を添へて喰はしむ。同村福田仙助の弟に又吉といふ者あり、其二三日前自宅の傍なる竹林に狐落しを仕掛け鶏を入おきたるに、其夜一疋の狐之にかかりたり。翌日解剖するに赤飯と赤魚と腹中にありて胃に音吉が喰はしめたる狐なりしといへり。(後略)^(註15)

註1 現在、西牟婁郡牟婁町伏見野

註2 前掲「瑛屋隨筆」第7編P.34—35

註3 現在、三重県尾鷲市

註4 同書 P.53—54。尾鷲・長嶋の打ちこわしを扱っていて興味深い。打ちこわしの仕方や、その場合にもわびごとをいって許されたのもあったことなどがわかる。

註5 同書 P.25 負けぎらいの若い武士の姿をありありとえがき出している。

註6 本宮にある。祭神その他については、見玉洋一「熊野三山経済史」(1954年改訂版)P.10—12を参照。

註7 現在、西牟婁郡中辺路町道湯川

註8 柳沢洪園(1708—1758)は大和郡山の人。伝記については伴葉孫「近世時人伝」(岩波文庫版、1940年)P.155—157を参照。なお森続三氏によると、「雲萍雜誌」は柳沢洪園の作ではないという。(岩波文庫版「雲萍雜誌」参照。)

註9 同書 P.41—43。なお、このテーマについて柳田国男氏は「ひだる神のこと」(「民族」1巻1号、1925年。後に単行本「妖怪談義」1956年、に収録。)において「なるべく広く各地の実例を集めて見たいと思ふ」といつて「雲萍雜誌」の記事その他を集めておられるが、この可道の文は引用されていない。

註10 同書 P.35

註11 同書 P.35—36

註12 石原正明(1764—1821)本居宣長・境保己一門の国学者。

註13 同書 P.31—38

註14 同書 P.1—3

註15 同書 P.5—7